

松原弘典氏にみる積極的受身

講演・対談シリーズ 「プロセスの意味とヴァナキュラー性、その1」
【日本の外で建築をつくるということ—中国とコンゴでの実践】

デザイン部会では、2011年UIA東京大会において、「グローバル建築を考える（ヴァナキュラーの変換としての現代建築）」をテーマに国際シンポジウムを企画しており、それに向かって今年度から「プロセスの意味とヴァナキュラー性」を視点に、建築家や専門家を招いて講演会、対談をする予定。今回、その第1回目に相応しい建築家・松原弘典氏（慶応大学SFC准教授）を迎え、5月11日、JIA館建築家クラブにて行った。国際的に活動されている建築家らしく、タイトルは「日本の外で建築をつくるということ—中国とコンゴでの実践」、40名近くの参加者の中、深みのあるディスカッションとなった。

■プロセス重視は手品か料理か？

氏は最初に「設計プロセスを重視することの背景にある欲望について、プロセスを「手品の種（内容を秘密のままにする）」として考えるか、あるいは「料理のレシピ（内容を公開する）」として考えるか、を区別したいという欲望ではないか」という仮説をたてた。更に、「設計

プロセスを重視するとは具体的には受身で建築を考えることではないか」とし、その受身の意味として「自己の決定に外部の要因を参加させること」という仮説を説明した。

氏はこの企画を受ける時に、当方とメールでの意思疎通をしているが、その時、自分の建築をプロセスやヴァナキュラー性の視点で捉えたことがなかったのが良い機会になると話されていた。そして、当日、仮説という形で、これに答え、3つの事例を通してその考え方を説明された。

■時間・気候・現地人・材料のプロセスへの参加

第一の事例とは、北京のY house、これは既存住宅の改修プロジェクトで、その外に新たな建築を覆うかのように設けたものだ。自然通風を利用し、季節によって生活する場所を変えようというコンセプトで、「時間要因、気候要因の設計プロセスへの参加」と位置づけた。デザインとして興味深いのは既存の建物の屋根が、内部階段に変換されている点で、丸ごと覆うことによりアクセシビリティに面白い空間ができていることで

JIA関東甲信越支部デザイン部会長 連 健夫



松原弘典
(まつばら ひろのり)

- 1970 東京生まれ
- 1995 東京藝術大学美術学部建築科卒業
- 1996 モスクワ建築大学研究員
- 1997 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士
- 1997-2001 伊東豊雄建築設計事務所副代表
- 2001-2002 波中、清藤市規劃設計研究院、北京非常建築研究所勤務
- 2002-2005 文化庁派遣建築術家在外研究員として北京大学建築学研究所センター外務講師
- 2005 北京松原弘典建築設計事務所設立 慶應義塾大学SFC准教授
- 2006 東北大学大学院建築学専攻非常勤講師

主な著書
「中国でつくる 松原弘典の建築」TOTO出版(2007)
「北京論 10の都市文化案内」丸善(2008)

ある。

第二の事例はコンゴ、キンシャサのアカデックス小学校のプロジェクト。校舎を設計するに当たって、大きく壁と屋根の2つに分け、壁は現地の人により現地の材料で造ってもらい、屋根については日本でフレームを設計検討し、現地では、日本人と現地人が一緒に造るという方法をとった。これを氏は「現地人・現地建材の施工プロセスへの参加」と位置づけた。そして、これを3つの「ない」建築として捉え、最終形のない建築（変化し成長する建築）、おしつけのない建築（いっしょにつくる建築）、精度のない建築（おおらかな建築）と説明された。このプロジェクトで興味深いのは、校舎建設の計画が今後何棟かあり、屋根のデザインも発展、変化することが予想され、今後、建物自身がプロセスを表現していくことになる点である。

第三の事例として、氏があげたのは、「時間要因の設計プロセス・使用プロセスへの参加」という位置づけで、新宿区に氏が購入した4階建てのビルで、それを今後、耐震補強を含めてリフォームするプロジェクトである。興味深いのは屋上に木を植え、その器を耐震補強にするという試みであった。氏自身が使うというアクションリサーチの視点があるのが興味深い。

■全体を考えつつ行動としてはローカル

さて、今回、講演の内容を深く読み解く中でディスカッションに繋げるべく、コメンテーターとして、東海大学准教授の渡邊研司氏を招いた。氏は近代建築が専門で、海外と日本双方で学術と実務の経験を持つ国際派である。氏は、松原氏のことを日本で納まらなく外国に出て活動することになり、その中で自分を相対化、客体化できるようになった建築家と分析した。更に、モスクワでの松原氏の研究に対し敬意を払い、そこでしっかりとしたモダンを学んだのがベースになっているとし、渡邊氏が興味を持つパトリック・ゲデスの考え方、すなわち「全体を考えつつ、行動としてはローカルである」を紹介し、現在の松原氏の建築活動と重ねた。

■積極的受身とオルタナティブな建築活動

その後のディスカッションは日本と外国の違い、ヴァナキュラーの意味合い、糧としての設計活動などの話題について、盛り上がった。その中で、特筆すべき点がある。

1つは、「積極的受身の態度」である。氏は単に受身と説明されたが、私から見ると彼の姿勢は常に積極的である。中国に渡った話も、コンゴのプロジェクトの話もオファーがあれば積極的に手を上げ、モノにしている。海外においては、文化の違いを含め様々な困難がある。それを柔軟に受け取り、ネガティブをポジティブに変換している。これが、私から見ると、国際的視点における時代の読み取りの中で正に必要な建築家の態度に思えてくる。

2つめは、フィービジネスではないオルタナティブな建築活動の重要性である。松原氏は北京で、もちろん商業的建築活動もしているが、そうではない活動を社会改革的視点で実施している。これは、私から見ると、間接的に彼の能力を深め、ブランドメイキングにも繋がり、建築家の価値を高めているように感じる。

氏は、「手品」でも「料理」でもない設計プロセスを考えられないか、受身の姿勢をトレードに使用したいとコメントした。そこに、中国やコンゴの異国で、鍛え上げられた戦略的タフさを感じる。但し、この「積極的受身の態度」には、必要条件がある。それ



渡邊研司
(わたなべけんじ)

建築家・東海大学准教授
(イギリス近代建築史研究)、
博士(工学)

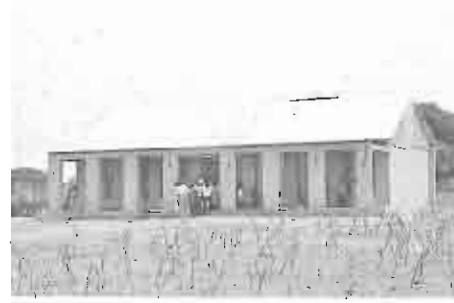
1961年生まれ、日本大学大学院修士、声原建築設計研究所を経て、AAスクール大学院修士(歴史・理論コース)、教育・研究に関わる傍らDOCOMOMOの活動を続けている。著書に「ロンドン都市と建築の歴史」(河出書房新社)など

は、様々な状況を柔軟に受け止めることができる確かな知識とスキルの引き出しの数が多いことであろう。

■ヴァナキュラーの捉え方で現代化が可能となる

ヴァナキュラーは、土着性や地域性のみならず、方言や意識、地勢など多様な意味と捉え方がある。それであるが故に、建築家によって様々な解釈が可能で、現代建築への創造的変換がありうる。少なくとも、どこに行っても同じスタイル(様式)がなりたつという時代はとうに過ぎ去り、それには応えていることになる。プロセスを大切にする姿勢とヴァナキュラーへの配慮が、画一化の問題解決、持続可能な建築や都市に繋がっていることは確かであろう。

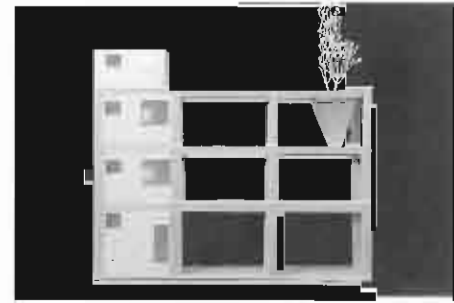
地球化というグローバル、地域というローカルを繋げた造語「グローバル」、その建築を考えようというUIAでのシンポに向かい、新たな視点を得た気がした。氏は「まだ自分の考え方は固まっていない、様々なところにアンカーはしているが、居所は決まっていない」とコメントされた。今後も氏の現在進行形の建築は見のがせない。



コンゴ民主共和国キンシャサ郊外「アカデックス小学校」



現地建材、現地人との協働によるプロセス



新宿区東五軒町ビル



北京 Y house 外観



北京 Y house 内観

NPO建築家教育推進機構からのお知らせ 第1回

JIA会員の皆様

一級建築士定期講習の受講はお済みですか？

NPO建築家教育推進機構では日建学院と共同で一級建築士定期講習を開催しております。講習の内容はNPO法人が担当し、講習会の開催、申し込み受付、登録などは日建学院が担当し、衛星システムを使い全国の会場で講習を行っております。受講を希望される方はJIAのホームページにありますボタン(右図)をクリックしお申込下さい。早期の受講をお勧めします。

尚、管理建築士の講習は当NPOでは行っておりませんので、他の登録講習機関(建築技術教育普及センター、総合資格学院法定講習センター)で受講して下さい。

NPO建築家教育推進機構

NPO法人建築家教育推進機構
一級建築士定期講習会申込み
ここからログインして下さい